

# 高尾山報

令和3年3月号



新貫首 力溢るる 福は内

# 法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(105)

ようやく春爛漫の候が近づいてきました。今にもほころびそうな桜のつぼみも準備万端でしょう。か。間もなく耳にする開花宣言が待ち遠しい折節です。

来る春は

峰に霞を

先立てて

谷の笥を

伝ふなりけり

(西行「山家集」)

(巡つてくる春は、春霞が立つのを前触れとして、冬の氷も解けはじめ、谷の笥を伝つてくるよ)

春の霞と秋の霧は、ともに季節の変わり目を感じさせるものとして、古くから和歌などに詠まれてきました。遠くにたなびく春霞は、山の稜にうつつらとお化粧を施すのでしようか。春を迎えて浮き立つ心が、谷の水

を解かしているかのよう

です。

歌に見える「笥」は「掛樋」「懸樋」とも書きます。

山などから水を引くために架け渡された樋のこと

です。私が住まいするお寺にも竹で作った笥があり

ますが、冬の間はずつと凍ったままでした。気

温が上がって氷が解け笥から流れ落ちる水の響

きが聞こえてきたとき

やつと春が巡ってきたのだ

だという実感が、喜びと

ともに湧き起こりました。

流れ来る笥の道は、自然

の息吹と鼓動を知らせる

生命の道なのもかもしれま

せん。

今朝濁る

笥の水は

水上に

誰か仏の

開伽に汲むらん

(「宝治百首」下野)

(今朝方、笥の水が濁っていたので、川上でどなたかが仏さまに供える水を汲んだのだろうか)

歌にある「開伽」という言葉は聞き慣れないかもしれませんが、もともと「価値あるもの」という意味です。「功德水」と訳される「神聖な水」を表します。

この「今朝濁る」の歌では、笥の水を開伽と表現しています。清らかな水を汲みつつ仏道修行に励む、山林の聖人に思いを馳せているのでしよう。

「焼開塗花」という仏教語があります。仏さまにお供えする代表的なものを「焼」に括弧にした名称で、「焼香」「焼」は香を焚く供える「開伽水」「塗」は香を塗って清める「塗香」「花」は花を供える「供花」を略したものです。「開伽」は、煩悩(心身を悩まし苦しめるもの)である「垢」を洗い流す清浄な水(香

水)でもあります。

ちなみに、開伽を汲む井戸を「開伽井」、汲み入れる桶を「開伽桶」、

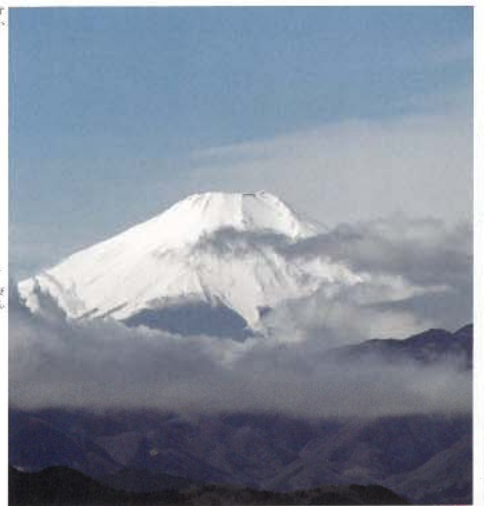
仏さまにお供えする柵を「開伽柵」、開伽を入れる器を「開伽杯」(開伽器)と言います。これらはすべて仏道修行に欠かせないものです。

三月十二日(旧暦二月十二日)には、奈良の東大寺において、春を告げるお水取りの行事が行われます。お水取りでは、開伽井屋の井戸で開伽水を汲み、お堂に運んで仏

前に供えます。この水は遠く若狭国(福井県)から奈良まで地中を伝ってきた、神聖な神仏の香水と言われます。

東大寺と開伽にまつわる話に次のようなものがあります。

今は昔、聖武天皇(七〇一〜七五六)が東大寺を建立し開眼供養(仏の魂を迎え入れる法要)を行おうとされた時のこと。行基(六六八〜七四九)という僧侶を講師(法要を司る人)に任じましたが、行基は「私よりも



富士山に春霞が立つ(写真提供:高岡輝幸氏)

## 折り折りの記 (139)

波多野 重雄

### 東風吹かば高尾の山に梅匂ふ

東風と言えば菅公(菅原道真)の歌で覚えた私達には、これが王朝時代の雅語であるという感じを拭う事は出来ない。

東風は歌言葉として愛好されてきたのであるから、東風と言えば「春を告げる風」、「凍てを解く風」、「梅の花を咲かせる風」という感じが生まれる。

東風と言葉を発すると、風雅意識を持つている人達ばかりである。「東風吹くと語りもぞ行く主と従者」と言う句がある。「東風吹く」と雅語を口にしていてるところ、この主と従者は和歌か連歌のたしなみを匂わせる。

芭蕉が俗語平和を正すと言ふ。言葉の変遷は面白い。一号路登山口の梅はお山に春を呼ぶ。(高尾山健康登山の会会長)

厚木市 荒井 一雄

### 春遊苗場山

白水雪呼我

登坂復回旋

山娘雪娘変

山童雪童遷

眉と目の

げに綺籠なりマスコ美人

げに言ひ得たり「眉目秀麗」

春、苗場山に遊ぶ

真白き氷雪(アイスバーン)は

我を呼び、

登坂、復た回旋(スキートの回転)す…

山ガールはスノーガールに変はり、

山ボーイはスノーボーイに遷はる…

ふさわしい講師が外国から訪れるでしょう」と申し上げると、百人の僧を引連れ出て出迎えるために摂津国難波の津に向けて出発しました。

到着してみると誰一人見当たりません。すると行基は、「前の開伽の台(開伽器)を用意して海上に浮かべました。台は波によって破損することもなく、西に向かつて流れ行き、やがて見えなくなりまりました。

しばらくすると、開伽の台が小船を引き連れて帰ってきます。その船にははるか遠く天竺(インド)から東大寺供養に参列するためにやってきた婆羅門僧正という僧が乗っていました。

婆羅門僧正は陸に上がると、行基と互いに手を取り合つて喜びました。異国の僧侶同士が仲睦まじくしているのは本当に不思議な光景でした。

(『今昔物語集』など)

行基は、開伽の台を西方の「法の水」へと送

## 高尾山薬王院中興第三十一世 山本秀順大和尚ご命日



二月四日は、先々代貫首・山本秀順大和尚の御命日であります。歴代先師墓地において、懇ろに御回向を致しました。大和尚は平成八年二月四日、世寿八十四歳にて御遷化されました。春一番の吹く暖かな春陽の中で、亡き大和尚の御冥福を祈り、墓前に香を手向けました。

桜散る  
覧の水は  
埋もれて  
花をまかす  
春の暮れかな  
(「信生法師集」)

(散つた桜で覧の水も覆われて、花びらを流れに任せる春の暮れであるよ)

開伽に浮かべた花を「開伽の花」と呼びます。いずれ春の暮れを迎えたら、風に散つた桜が開伽の水面に降りかかるのでしょうか。花びらを浮かべた開伽水をお供えすれば、ご先祖様もきっと春の到来を感じてくださるでしょう。

(栃木北部教区普濟寺)



八王子車人形の西川古柳座と八王子芸妓組合の皆様



落語家の柳家小さん師匠と玉鷲関も豆をまく



大本堂前にて人気者達から福豆を頂く人々



佐藤御山主と共に記念撮影する歳男と歳女



「ムササビ〜ず」のムツちゃんも参加



本年は感染症対策のため福豆を袋に入れて小分けにしました

疫病退散を願う「福は内」  
**高尾山**  
**節分会追儺式**

# 二月十五日(釈尊入滅の日) 高尾山釈尊涅槃会

お釈迦様が入滅されたと伝わる二月十五日に、高尾山上において釈尊涅槃会が行われました。

有喜苑・仏舎利塔内において、佐藤山主御導師のもと法要が営まれました。仏舎利塔には、タイの寺院・ワット・パクナムより分贈されました、大聖釈迦牟尼世尊(お釈迦様)の真身骨が、奉安されており、御書院内に飾られた「高尾涅槃図」の前で、お釈迦様の御遺徳を偲び懇ろに御供養されました。

高尾涅槃図には、お釈迦様が入滅された時の弟子達、動物達の悲しむ様子が描かれており、紅葉の木や、天狗、ムササビなども登場しております。



お釈迦様の御遺徳を偲び法要が執り行われました



御書院に飾られた高尾涅槃図

# 初午福德稲荷祭

二月三日(水)

去る二月三日、飯縄権現堂(御本社)脇の福德稲荷社において高尾山初午福德稲荷祭が行われ、佐藤山主御導師のもと、家内安全・身体健康・商業繁昌・五穀豊穰などが祈願され、参列の御信徒の皆様と共に祈りが捧げられました。

この日はちょうど立春に当たり、春の気配を感じながら、大勢の皆様から御奉納頂いた五色旗が賑やかに掲げられております。

初午に法要が行われた由来は、京都伏見の稲荷神社の祭神が、和銅四年(七二二)の二月最初の午の日に降臨し鎮座されたと伝わるためです。



稲荷社には奉納された五色旗が飾られます

## いけばなの心 ⑬

華道教授 佐藤 宗明

『お花見』と言うと、どんな花を思い浮かべるでしょうか？

おそらく『桜』という方が多いのではないのでしょうか。私も『桜』を思い浮かべます。しかし、ずっとそうだったかと言うと、実はそうではありませんでした。

元々日本には、春に咲く桜に秋の豊作を祈願すると言った風習があったそうです。

それが遣唐使の頃、中国から送られて来た梅の木が多く植えられると、梅の花を愛でる風習として定着したと言われます。万葉集の頃には、梅の花を題にした歌が約百二十種、桜を題にしたものが約四十種と、春の花と言えば梅の花だったようです。

さて、今回の作品はそ



花材：白梅

の梅の花を使った生花です。今回の生花は少し変わったもので、天井から吊り下げられた器に生けてあります。最近考案されたものではなく、『雪花』という伝統的な花器です。

普通の生花は天に向

かって真っ直ぐに伸び立つ姿に生命感を表現しています。一方、この姿は平地に生える植物の生命感ではなく、例えば崖の上のような険しい環境に生える、植物のたくましい生命感を表現しています。

今年も昨年に引き続き、大人数でのお花見は難しいような情勢です。いろいろな姿のいけばなを見て、心を和ませて頂ければと存じます。

## 高尾山の昆虫

### キイロゲンセイ

137

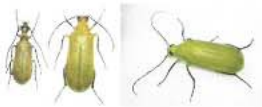
一頃、珍しい赤いクワガタが見つかったというニュースが飛び交ったことがあります。これはクワガタではなく、ヒラズゲンセイ(平頭荒青)という全く別の甲虫です。

比較的大型で立派な大アゴを備えているため、そう見えたのでしょうが、南方系の種で高尾にも分布しております。

その代わり同じゲンセイの仲間、比較的大型のキイロゲンセイ(黄色荒青)が生息しています。本種はその形状から一見カミキリムシに見えますが上翅は柔らかく、この特徴はジョウカイボンと思わせるものの、実はツチハンミョウ科の仲間、不注意に触るとカンタリジンという、皮膚炎を起こす有毒物質を含んだ体液を分泌するので、要注意です。

高尾では灯火に飛来した個体をたまに見かけますが、他のフィールドでカラスザンショに本種が夥しい数集まっているのを見かけたことがあります。とても清楚な黄色で色彩的には十分綺麗な種ですが、それとは裏腹に眼は黒く悪魔的な雰囲気醸し出して不気味です。

それは警戒色であり触つたら大変なことになるよ、との他の生物への警告であることは間違いありません。



(撮影・文松島 孝)

# 観音菩薩の宗教

39

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

## 観音菩薩の転生者としての聖徳太子 (その2)

聖徳太子についての最も古い記述は『古事記』に見られるが、そこでは「上宮之厩戸豊聡耳命」が生まれたとあるのみで、政治的功績も宗教的描写も述べられていない。同書で太子の超人的描写を夥とさせるのは、その名の「聰耳」が聴力にすぐれた人の話をよく理解することという意味を有することぐらいである。

『古事記』の八年後に完成したとされる『日本書紀』では、聖徳太子に関する記述は飛躍的に増える。そこには推古天皇の撰政(原文では「万機を総摂し天皇事したまふ」とか「政を録撰しめ万機を以て悉く委ぬ」とある)となった聖徳太子の政治

的な足跡や文化的な業績が記されている。前者に関しては、冠位十二階を制定したり、『十七条の憲法』を作ったりしたこと、隋の皇帝に「日出処天子、致書日没処天子、無恙云云」と認めた国書を送ったことが述べられ、後者に関しては斑鳩宮の西方に斑鳩寺を創建したこと、『勝鬘經』や『法華經』の講義をして仏教を振興したことなどが記されている。ここでは聖徳太子が優れた政治家であり文化人であったことを

を髣髴させるが、神仏に近い、あるいはつながる超人的人物であるとする記述は少ない。そうしたなかで聖徳太子の超人性を示唆するのが、推古二



木造日羅立像。橘寺藏。貞観時代。重要文化財。『國寶 奈良帝室博物館陳列』(Kindle版)より

十一年条に述べられる「片岡山遊行説話」のエピソードである。以下、要略を示そう。部分的に○に原文を書き下し文にして入れた。また、和歌の訳文も○に示した。

「皇太子、すなわち聖徳太子が片岡(現・奈良県北葛城郡)を遊行しているとき、飢えた人が道で横になっており、姓名を問うたが答えなかった。皇太子はこれを見て飲食を与え、自分の衣裳を脱いで彼にかぶせて『安らかに寝ていなさい』と言って、彼を憐れむ歌を詠んだ。

飯に餓て臥せるその旅人あはれ親無しに汝生りけめやさす竹の君はや無き飯に餓て臥せるその旅人あはれ

(片岡山で食べ物に飢えてたおれれている、その旅人はあわれなものだ。親がなく生まれたはずもない。主君はいないのか。食べ物に飢えてたおれれている、その旅人はあわれだ)翌日、使者に見に行かせると、飢えた者は既に死んでいた。皇太子は大いに悲しんで、その者を埋葬させ、墓を固く封印させた。数日後、皇太子は近習の者を召して、『先

日、道に臥していた飢えた者は凡人ではなく、必ずや真人である』と言いつ、墓を見に行かせた。使者は帰ってくるや、「封印した墓は動いていないのに開けてみると遺体も骨もなく、ただ衣服が骨上で棺の上にありました」と告げた。皇太子は再び使者を遣わしてその衣服を持ってこさせると、いつものようにそれを着た。時の人々はこれを不思議なことと思ひ、「聖人が聖人を知るといふのは真実であった(聖の聖を知ること、其れ実なる哉)」と述べ、ますます尊敬した(逾惶まる)。」

古代史家の吉村武彦は、この説話の前半は聖徳太子の仁慈を物語り、後半は道教の神仙思想における聖人を見抜く聖人を述べているとし、飢えた人には道教の死骸とともに消える「尸解仙の真人」の影響が見られるという。この説話はそのちに多くの伝承を生み、太子信仰の中で誇大化していく(『聖徳太子』岩波新書、二〇〇二年)。それはいわば超人的な聖徳太子の原点であり、「太子信仰の起点」である(同前)。ここではまだ太子の前身譚や観音菩薩の生まれ変わりとする思想は見られませんが、観音菩薩のごとき慈悲に満ちた存在であることは語られている。

聖徳太子の前世や観音転生説が述べられるのは、平安期に成立した『聖徳太子傳曆』(以下『傳曆』)である。『傳曆』における聖徳太子の母の懐妊にまつわる奇瑞譚については前号です

に見た。今回は、太子が観音菩薩であると見る『傳曆』の主張を見てみよう。『日本書紀』では聖徳太子の前世が観音菩薩であると示唆するのみであったが、『傳曆』では明らかに「太子」観音菩薩とする二種のエピソードを伝えている。ひとつは敏達天皇十二(五三八)年秋七月、父を日本人とする百済の官吏の日羅が来朝したときの記事であり、もうひとつは推古天皇五(五九七)年四月に百済の王・阿佐が来朝したときの出来事である。その際、両者は聖徳太子を観音菩薩として合掌敬礼したとされる。今号では、日羅来日の一節を見てみたい。まず以下に要点を和訳して示し、続いてこれを解説する。なお、官吏の日羅は『傳曆』では高僧として描かれている。

「百済の賢者たる日羅が来朝すると、聖徳太子はその為人を視ようと密かに粗末な服(微服)を

着て童子らとともに館に入った。日羅は太子を指して『いかなる童子ですか、この人は神人です(那る童子也、是神人矣)』と言った。太子が驚いて立ち去ると、日羅は還拜し履を脱いで走った。太子が着物を着替えて出てくると、日羅は迎えて再び拝した。太子が日羅の坊に入ると日羅は跪いて合掌して、『敬礼救世観世音菩薩。傳燈東方粟散王云々』と言った。太子は身なりを整え腰を屈めてお礼した(太子、容を修め折聲して謝す)。日羅は体から炎のような光を放ち、太子は眉間から太陽の暈の枝のような光を放った(日羅、大いに身光を放つこと火の熾んなる炎の如し。太子も亦、眉間より光を放つこと日の暈之枝の如し)。」

上記でもっとも重要なことは、これが史実でないまでも、日羅が太子のことを「救世観世音菩薩」と称し、讃歎したことである。法隆寺の救世

観音の人氣もあって、救世観音の名は飛鳥時代よりあるものと思われがちである。しかし古代文化史家の藤井由紀子によれば、救世観音は『傳曆』が初見史料であるのみならず、日本以外には見られないという。それはまた、聖徳太子のみに適用される名称であり、聖徳太子の別名として『傳曆』において成立した概念であるとされる(藤井由紀子『聖徳太子の伝承』吉川弘文館、一九九九年)。従来、救世の語は『法華經』『普門品』の「観音妙智力、能救世間苦」から導き出されたというのが定説とされてきており、筆者もかつてそれを紹介した(拙稿「観音菩薩の宗教」⑬)。しかし文法的に見れば、「能く世間の苦を救う」から「救世」を導き出すことは困難である。藤井由紀子によれば、元来、諸經典の中で仏菩薩を讃える美称語だった「救世」が、

鎮護國家の思想を経て『傳曆』において観音菩薩の妙智力と結びつき、聖徳太子の徳を象徴する語となったとされている(「救世観音の成立」大山誠一編『聖徳太子の眞実』所収、平凡社、二〇一四年)。聖徳太子が救世観音であるとする思想は、『傳曆』を起点に時代を降って広く展開していき。上記では、日羅は太子について「傳燈東方粟散王」と呼んでいる。「粟散」とは粟粒を散らしたように小さなもの意で(天竺(インド)や震旦(中国))に比べて小国たる日本を指す。その意は、「仏教を弘め伝える東方の島国日本の王」である。その太子が眉間から光を放つのは、太子は単に色身すなわち肉身としての王であるのみならず、仏菩薩と同じ超人性を表すものにほかならない。今回は百済の阿佐が来日し、聖徳太子に面会する『傳曆』の記事を見る。

# 音楽は命綱

シャンソン歌手 友納あけみ

いち早く春を告げてくれる梅の花も満開に！ やつと寒い冬も終わりを迎えそうです。我が家の窓辺からの眺め！今日も夕暮れのシヨウが始まりました。

真っ赤な夕陽が辺りを茜色に染め上げ、夕陽は沈みながら色のグラデーシヨンを変幻自在に変えていきます。雲は最高の脇役！悠やかな風に流されながら鮮やかな色合いを柔らかに包み、温かな光を投げてくれます。夕陽が燃え尽きた様に沈んでいくと、くつきりと影絵の様に富士山が浮かび上がってきます。冷たい朝の真っ白に雪化粧した富士山とは、また違う

富士山とは、また違う趣です。辺りが夜景に変わる頃には冬の星座がうつすらと輝き始めます。母が亡くなって十五年

が経ち、母が大事にして

いた半世紀も前に亡くなった父の遺品も含め、荷物の山！これは片付けられない！思い切つて必要なものだけを持って、新しい暮らしを始めよう

と決意、部屋を探しだした何十件見たことか！リビングの正面のこの大きな一面の窓をみた時に、一目惚れ！この部屋に決めた！引越して、丸二年！毎日のこの景色！春夏秋冬、朝、昼、夜！コロナ感染の自粛の日々も続き、どれだけこの窓辺に癒されたことか！

流れて来る情報もいつたい、どれをチヨイスしたらいいか？専門家と言われる方達の意見もまぢまぢ、自分のことは自分で守らなくてはと思うものの、正確な状況の把握ができないことには…

心細い日々を音楽は支えてくれます。こんなにも必要不可欠なものだったのか？改めて思い知らされています。音楽との時間だけは、どんな厳しい現実も、不安な想いも忘れさせてくれます。数少ないライブも本当に貴重な大切な時間！皆様と、ミュージシャンの仲間達との時は、心を殺さない為の大事な時間です。決して不要不急なものではなく！命綱の様なもの、分かって欲しい！みんなで力を合わせ、出来る限りの感染対策をして、静かに、細々でも続けていきます。



# 院内散歩

薬王院の展示物



版画「この道しかない」 作・秋山巖

# 知進知退 随時出處

八王子市 澤田 守正

この文言は、大相撲に於ける立行司の最高位の名称である。

『この一番にて本日の打ち止め』

と、唱える木村庄之助家に代々受け継がれている、「譲り団扇」とも呼ばれている軍配に記されている。

意味は進むべき時を知り、退くべき時を知り、いつでもそれに従うこと事。

立行事は左腰に短刀を帯刀し、判定を差し違えた際には切腹する覚悟で命をかけて土俵に上がる。しかし、言葉としては解るが現実には、この言葉通りに自分を処せるかとなると、大変難しい問題である。自分がその状態に立たされているとの現実が、自分では解っていない人もいれば、解って

はいても、未だ良いだろうと自分を自分で納得させ、決断を先延ばしにする人もいる。だから自ら決める出処進退は難しいのである。

どんな職業においても、自らの出処進退を決めるのは、年齢ではないと私は思っている。

自らの力が通用し、周囲もそれを認めるうちは、年齢に囚われずに現役を通せば良いし、その方が健康も持続出来る可能性が多くなるからである。

# 安楽の道

精進努力してこそ、安楽の道に列なる

大山前賞首の揮毫

しかし、ここで誤つてはならないのが、「知進知退 随時出處」である。要は、進むべき時、退くべき時を、自分なりに考えられる人間であるか、流されてはいないかを考える余裕と、自分を律する心構えを持っているかどうかという事であろう。例えば新宿御苑で満開の桜に逢える事が出来る

## 散り際千金

である。

咲く時を知り、散る時を知っているのが桜なのである。いつまでも人間は生き続ける事はできない。桜花のような感動を与えられなくとも、自らが接した人に、わずかでも心に残る想いを残す事が出来たであろうかと、ふ

随時出處、もう一面に「冬則龍潜 夏則鳳舉」と記されており、龍は厳しい冬の時は海に潜って息をひそめ、夏を待ち鳳凰になり飛び立つという事であり、耐える時、辛抱する時は耐え、時至れば羽ばたくという意味合いです。

もう一本は白檀製で昭和四十六年（一九七二）一月に宝塚市の清荒神清澄寺から贈られたもので、一面に牡丹、もう一面に唐獅子の彫金が施されている。

また洋画家で「画壇の仙人」と呼ばれ、九十七歳で没した熊谷守一は、人生を「三風五雨」と表現し、人生を十日間とすれば、暗れる日は二日ぐらいいで、三日は風が吹き、五日は雨が降るのだと言っているが、この世に生まれた限りは、この「人生の晴れ間」を大いに楽しまねば、この世に生まれてきた甲斐がないではないかと思うのである。

# 高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

15

## 八世源實3―高尾山焼亡

天正二八年(二五九〇)七月、豊臣秀吉の来攻により小田原城は開城。責を負って北条氏政とその弟、八王子城主であり高尾山とも縁浅からぬ間柄であった氏照は切腹して果てた。

### 大久保長安書状の謎

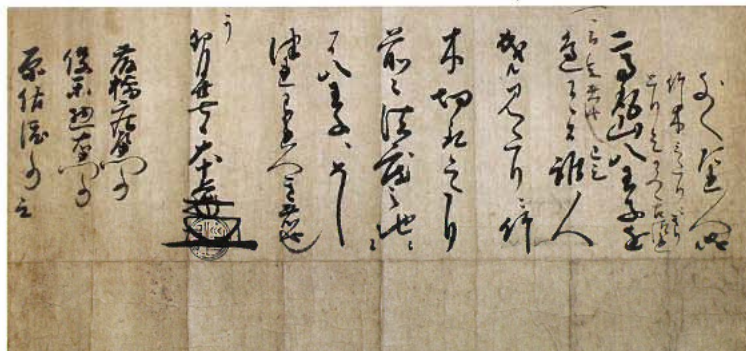
北条氏没落の後、江戸時代前期の寛永年間(一六二四〜四四)前半まで四〇年ほどの間、高尾山の動静を知る史料は非常に乏しくなる。高尾山の歴史は再び霧の彼方に隠れてしまった感があるが、数少ない手がかりを探ってみよう。

の支配の基礎を固める使命を与えられたのは代官頭と呼ばれる家臣の面々であったが、北条氏照亡き後の八王子地域を治めることになったのは、大久保石見守長安であった。その長安による配下の代官、藤橋庄左衛門、設楽惣右衛門、原佐渡の三名に宛てた天正二九年四月二七日付の書状が薬王院文書に残る。

書面では、高尾山八王子近辺にそろう間に、誰人なるともみだりに竹木切り取りもさうらばはば、前々より法度の地にそろう間、八王子へ召しつれられべきものと、山林の無断伐採をする者を逮捕連行するよう命じている。

この長安による竹木伐採禁止は高尾山に対する保護策と解釈されてきたが、実のところ文面には不明確な部分が多い。冒頭の一文にしても、解説文のままに読めば「高尾山は八王子の近辺なので」となるが、この微妙なニュアンスを決める「二候間」の三文字は決して文字として明瞭ではない。それからすると、伐木禁止の対象としては「高尾山」「八王子」「近辺」の三ヶ所に考慮の余地もある。宛所が高尾山であれば明確なのだが、そうはなっていない。また、竹木伐採を禁ずる理由が「八王子の近くだから」というのも、今一つ意図が不明瞭である。そして、ここで言う「八王子」は長安がこの時期拠点にしていた元八王子ということになる。あるいは、冒頭の「八王子近辺にそろう間」というのは、単に高尾山の所在地を示しているだけなのかもしれない。

「誰人なると」という言い方は、宛所が代官である以上、高尾山薬師堂別当も含まれていると解釈できない。一方、「前々より法度の地」というのは後北条氏による伐木禁令を指していると解釈されるので、この部分から高尾山内の山林保護のニュアンスが感じられる。しかし、高尾山薬師堂に対する保護策であれば、後北条時代と同様に薬師堂別当が宛所となるべきところ、そうではないのは何故なのか? 別に高尾山宛のものが存在したのか? それならば、代官が受け取った文面がなぜ薬王院文書として遺されたのか? この時期の高尾山の様子を示す希少な史料ながら不明な部分が多い。



配下の代官に対し伐木禁止を知らせる大久保長安書状(写真提供:八王子市郷土資料館)

### 家康による寺社領通知

同じ一九年十一月、家康は領内各地の寺社に対し寺社領を安堵した。主

だつた寺社の領地をあらためて自身の名で安堵することにより、寺社勢力を徳川氏の体制の中に組み入れたのである。

西多摩においても府中六所宮(府中市)、大幡山宝生寺(八王子市)、大悲願寺(あきる野市)、御嶽山(現武蔵御嶽山)

三重高崎寺雲居知照の依靈地有靈  
本尊醫王如来靈像草創以來格敷敷  
不知建立誰人前代以全願摩有堂塔切十餘  
胸斬絶全有一院僧五百諸難送諸木  
満々米無院貧單慈朝飢飲水夕无通  
本尊膝雨毛飛汚屎重意鶴跡脚傾於  
錫蓋可成新事亦有餘敷無極飲為難  
弱於甲申檀那請息經經去成是是  
我是一切無明闇夜為燈明入苦海為眼  
氏奇責新食為質糧煩煩業為良集  
一院修入無間度六親眷属推罪障  
生都草天身尊金色膚倫三三相放並光  
則照道群類寸鎖志後巨海深木恩從

高尾山の窮状を伝える八世源實の薬師堂勧進帳案

社・青梅市)と主だつた寺社が領地を安堵されている。しかし、ここには当然含まれて然るべきと思われる高尾山薬師堂の名はない。実際、薬王院が徳川幕府から領知朱印状を発給されるのは半世紀以上を下つた慶安元年(二六四八)を待たねば

ならない。これはいかなることか? 北条氏の祈禱所だつたが故か。が、同じ立場の宝生寺が含まれているのでそうではなからう。

八世源實に関わる史料として、薬師堂の修造を謳った勧進帳の案文が遺されている。文字通り薬師堂の修造費用を募るための文面であるが、内容からすると堂は焼亡して一からの再建である。しかし、その事以上はこの勧進帳には次の一文のような衝撃的な状況が述べられているのである。(原文は漢文)

時断絶して今一院に僧四・五口有り、居諸送り難く諸木満々として八木(二米)既に無し、菓を食つて朝の飢えを慰め、水を飲んで夕の憊いに充つ、草葉を綴て衣となし、茅萱を編んで笠となし、(略)本尊は雨に曝れ、烏鴉の屎糞に汚れ、鶯鶯蹂躪して傾く、終に銅釜の薪となるべきこと

悲しむに余りあり、歎くに極まりなし

住僧の衣食にも事欠く様が述べられ、何たることか、本尊薬師如来が露天に野ざらしとなつているといふ。現在、大本堂の斜め前に安置されている寛永八年(二六三二)鑄造の古鐘の銘文にある「図らずも世の不平に遇つて烏有となる(原文漢文)」は、この勧進帳に記された状況を言っているのだろう。「二院に僧四・五口」とは言え、本尊を仮に移す場所もないとは、伽藍も全焼に近い状況が想像される。

この史料は年次がない。源實の在任年の天正五年(二五七七)から慶長五年(二六〇〇)というのは江戸後期の史料に拠るのだが、大きく時期を外していないと考えられる。源實に関わる史料は永禄三年(二五六〇)にさかのぼり、その時点で九世源恵と同時に伝法を受けていることから、天正一八年以降、それ程長く

在住したとは考えにくく、慶長五年の隠居年は不自然ではない。そして、少なくとも北条氏健在の折にこのような状況があるとも思えないので、この高尾山荒廃の情景は北条氏滅亡の後、徳川家康が関東に入る前後からしばらくの内に現出したことと推測される。

すると、天正一九年における寺社への領知から高尾山薬師堂が抜けてしまつていたのは、荒廃状態にあり寺院としての実在が認められない状況だつたからではないか、という仮説ができて来る。

北条氏という庇護者を失うとともに、その伽藍もまた失われるという、高尾山存亡の危機が訪れた。(参考文献) 藤田伊人編『大日本地誌大系新編武蔵風土記稿』第五卷(雄山閣出版、一九七〇)。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

平成二十七年の三月六日のことでした。早朝に六号路を上り、途中で稲荷山へ抜け、二号路から奥高尾へ歩いていて、道案内板の前に行んでいた僧が、私の方を向き、「少しお尋ねしたいのですが、この三つに分れているその先は？」と質問されました。

私が説明した後、「和歌山まで」「和歌山まで」「あの熊野古道の和歌山、どちらからお越しになられたのですか」「和歌山から」「和歌山から」「ということでは東海道を通ってきたのですか」「いえその前に九州に行きました」「和歌山からだ」と山陰と山陽どちらを回られたのですか」「両方です」「平成二十五年初めから

健康登山者投稿  
**思い出深い出会い**  
瀬戸千恵子



修行に出ています」「私もツアーで那智に行ったことがあります」「和歌山のどちらですか」「高野山です」「そうですね、私も一度は訪ねたいと思っています」「高野山は今年開創千二百年ですので是非いらして下さい、高尾山へは薬王院が真言宗のお寺なので参拝させて頂きました」

こんな会話をしている、

厚かましい私が「もし差し支えなければお写真を撮らせて下さい」とお願いすると、「こんな感じで良いですか」ポーズをとって下さりました。私からお布施を出そうとすると、「五円だ」と御縁があるの嬉しいと、控えめにお願いしますのでお賽銭用を持っていくのをお渡ししました。

「ありがとうございませす。お気をつけて」と互いに言いながら僧は真中の道を、私は左の道へとそれぞれ進みましたが、お話を柔らかく身に染み込ませました。



境内を掃除する原様 (写真提供：松山ほずみ氏)

**御礼**  
**境内を自主的に清掃**

このたび八王子市にお住いの原正夫様が、健康登山を続けられ、二千百回高尾山を登られ百冊満行を達成されました。

原様は登山のたびに境内清掃をして下さり、二月二十一日の御護摩修行に参列され、佐藤御山主より、環境美化に御尽力頂いたことに対し、感謝状を贈呈されました。

お話を伺いますと、原様は長年バスの運転手を務められ、定年後の二〇一五年から健康維持の為、登山を始められました。その年の六月から、有志による早朝境内清掃に参加されるようになり、今では掃き掃除だけではなく、草むしりなども行っているとのこと、これからも自分のペースで高尾山に登って、清掃を続けていきたいと語られておりました。

原様におかれましては、感謝申し上げますと共に重ねて御礼申し上げます。

高尾山 季節散歩

暦の言葉  
「七十二候」  
雀始巢  
「すずめはじめてすくう」  
三月二十日〜三月二十四日頃

字の通り、雀が営巢を始める時期という意味です。  
雀は日本人にとって、とても身近な鳥です。実った稲穂を食べてしまうこともありますが、子育て期間には、田畑の害虫を食べてくれます。

健康登山者投稿作品  
季節の絵手紙「アマビエ」  
八王子市 梶谷玲子 様



**一步一步煩惱滅除**  
百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

九十八段 **自分自身で見極める**

「聞くとは見るとは大違い」という言葉にありますように、自分で体験してみると、噂で聞いていたこととは全く違うということがあります。何事も人任せにせず、自分で考えて行動することも必要です。

今月の風物詩  
**蒲公英**

タンポポは世界中に広く分布しており、漢字の蒲公英は中国で使われているタンポポの漢字表記で、そのまま和名の「たんぽぽ」に当てられたものです。タンポポは食用や解熱・健胃薬作用の薬として使用されており、根を使った「タンポポコーヒー」等もあります。

◎健康登山の皆様へ  
高尾山報投稿の御案内  
御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ボエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※投稿頂きました作品は全て掲載できるような努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。

「高尾山健康登山の証」のお勧め  
年間約二百八十万の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースで楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すペーシがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い贈りとして、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面………七百円  
スタンプ…百円



おはなし散歩道

くさだんご

町田市 大澤桃代

よもぎの時期になると、カズコはくさだんごを作ります。夫のミツルの好物だからです。

「ばあば、アイリもおだんご、作りたい!」

四月から年長になる孫がいきました。よもぎの絵本を見たそうです。

「じゃ、みんなで作ろう!」

カズコが言って、三月の終わり、娘一家とくさだんごを作ることにになりました。

カズコは力をこめて、

「よいしよ、よいしよ」

と、上新粉をこねます。

鮮やかな草色の生地ができました。

「よいしよ、よいしよ」

と、アイリもがんばっています。春の香りが、部屋いっぱい広がります。

カズコはうっとりとして生地をながめます。カズコ

が作るのは、「くさもち」でも「よもぎだんご」でもありません。「くさだんご」です。ミツルがそうよんだからです。

カズコはふり返ってミツルを見ます。

ミツルは笑っています。

「アイリつかれちゃった!」

アイリがいました。

生地は、ぼんやりとした緑色のままです。

「パパにお願いしようか!」

カズコが言うと、

「パパ、手つだつて!」

アイリはパパをよびました。台所のおなべからゆげがあがって、甘いにおいがします。パパはあんこを煮ていました。くさだんごにのせたりまぶしたりして食べるのです。

よしっ! と、パパはうでまくりをして、生地をこねます。生地はすぐに鮮やかな草色になりま

した。カズコとアイリは、パパパチ拍手をしました。「じゃあ、おだんごにしてゆこうね」

カズコが、草色の生地を丸めていきます。アイリもまねをします。そして、あんこをのせたり生地の中に入れたりきな粉をまぶしたりしました。

「アイリ、じょうずだね」

カズコはかんしんします。アイリのは小さいけれどまん丸です。大きさがまちまちのおだんごがたくさんできました。

パパが取り皿とコップを用意します。

「ママ、おそいなあ」

パパが冷蔵庫をチラッと見ました。サラダやビールが冷えているのです。

「唐揚げ待ってるのかな」

ママは駅前へ買い物に出ています。人気の店だから混んでいるのでしょ

う。くさだんごを食べるときは、唐揚げもいっしょに食べます。まるで、約束みたいなんです。

そして、パパとミツルは顔を合わせると、いつ

もビールを飲むのです。

「先に食べようか?」

カズコが聞くと、アイリは首をふりました。

「いただきます」はみんなでするんだよ。ねっ、じいじ!」

ミツルは笑っています。

カズコが麦茶を出したとき、ママが帰ってきて、やつと全員が揃いました。

「お父さん、乾杯ですな」

パパがミツルの写真にグラスを向けます。くさだんごとビールが、仏壇の写真の前にあります。

カズコは思い出します。

「草なんか食えるか」

はじめてくさだんごを作ったとき、ミツルは言いました。よもぎを道端

の草だと思っていたようです。カズコはがっかりして一人おだんごを食べました。お皿いっぱい作つたのにと、仕方なく残りにラップをかけて、買い物にいきました。ところが、帰ってみるとおだんごがありません。訳が分からず首を傾げていると、ミツルが言いました。

「くさもち」や「よもぎだんご」は食わんが、くさだんごはすきなんだ」

照れ屋のミツルの声がかきこえるようになって、

「お父さんが亡くなつて、もう三年がたつたのね」

ママになった娘が言いました。

(挿し絵・小出 茂)



高尾山物語 35

岩屋大師

絵・橋本豊治



弘法大師伝説

お大師様が歩いた足跡には数多くの伝説が残されており、お大師様は北海道を除いて全国津々浦々にあり、寺院建立や仏像彫刻、岩石など様々ありますが、特に泉や井戸などの、水に関するものが著名です。

高尾山麓のケーブルカーの清滝駅から、琵琶滝まで歩いている途中に、弘法大師様(空海)がお祀りされている「岩屋大師」と呼ばれる洞穴があります。

この洞穴の名の由来として、高尾山には次のような、お話が伝わっております。

お大師様が夏の盛りの高尾山中を歩いていると、にわか雨に降られて雨宿りの場所を探しておりました。すると、大岩の近くで、激しい雨風に曝されてうずくまる、巡礼の母子を見つけられました。

お大師様は病気の母とその母を看病する娘を救わんと祈りを捧げると、大岩が崩れ、ぼっかりと岩屋が現れ、その岩屋で身体を休めていると母の病は癒え、母子は難を逃れたということです。

結果だけの判断でなく、そのいく過程よく学べ

いろは 天狗の落し文 ②



ろ 老幼不定 生き生き 生き生き 生き生き 生き生き 生き生き 生き生き 生き生き 全力人生悔いなし

老幼不定とは、人生の無常を意味する言葉です。つまり、人間は必ず死ぬものですが、年齢の高い順番で老人から先に死に、若者が後から死ぬとは限らず、人間の生死は予測できないということを意味しております。しかし、そうはいつでも死を恐れながら生きるのではなく、死とは必ず訪れるものだから、辛い現実から目を背けず、自分がある「今」を大切に、人生に満足できるように、全力で生きていくことが大切

相模原市	八王子市	川越市	さいたま市	八王子市	深谷市	あきる野市	佐野市	八王子市	さいたま市	小平市	相模原市	日野市	前橋市	高崎市	高崎市	相模原市	八王子市	高崎市	熊谷市	前橋市	深谷市	熊谷市	熊谷市	高尾山報助成金志納者 御芳名(順不同・敬称略)			
野津	羽生	峯尾	本吉	小内	鈴木	澤井	荒居	塚本	有山	池田	谷田	北原	北原	中山	阿南	北村	落合	石井	永田	田中	藤子	橋本	橋本	房子			
英央	常男	洋一郎	義光	健次	健也	茂男	幸子	道男	ハツ子	順子	光代	登	幸代	賢	憲次	良一	義晴	征二	滋	藤子	口組	富十夫	裕				
大垣市	多摩市	相模原市	加須市	台東区	鴨川市	熊谷市	八王子市	川口市	伊勢崎市	佐世保市	葛飾区	大和市	横浜市	西磐井郡	足利市	八王子市	杉並区	板橋区	秩父郡	甲府市	北区	草加市	八王子市	小平市	船橋市	八王子市	比企郡
二村	村山	原	高橋	野木	佐伯	浄	藤田	田所	守屋	早船	内田	岩村	伊勢崎市	南	井上	神崎	岡田	龍	荻野	宮下	須藤	須藤	須藤	須藤	須藤	須藤	山崎
きよみ	多恵子	武	武	新藏	明恵	照	妙子	惣一	正	百合子	國一	ユキ子	シマヨ	シマヨ	雅也	幸子	成子	玉	キヨ	光	泰晴	晶	和子	祐司	福栄	和男	平生
高尾山健康登山者一同	大久保	伊三	勝盛	伊三	千恵子	菜子	健一	悦子	邦裕	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子	悦子

# お護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様が御木尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切に持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯繩大権現」とお唱え下さい。



**郵送御護摩**  
申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方にお住まいの方や、感染症流行によりお参りできない御信徒皆さまのために、御護摩札の郵送も受け付けております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、高尾山薬王院の公式ホームページ内にあります「御護摩祈禱の御案内」からも、直接お申し込みすることが出来ますので、こちらも併せて御案内申し上げます。

ご不明な点等ございましたらお問い合わせ願います。

お問い合わせ先  
TEL 042-1661-2255  
FAX 042-1664-2999  
「郵送御護摩係」まで

## 高尾山のお護摩札とお供物

<p>交通安全 (スチッカー) (車内用札) お護摩 3,000円以上</p>	<p>お護摩 5,000円以上</p>	<p>お護摩 10,000円以上</p>	<p>特別大護摩 30,000円以上</p>	<p>開帳大護摩 50,000円以上</p>	<p>特別開帳大護摩 100,000円以上</p>
<p>お護摩の願事 お願ひ事は一件一願意とさせていただきます。</p> <p>御 札 (心願成就)</p> <p>奉納杉苗 (心願成就)</p>	<p>お護摩の願事 お願ひ事は一件一願意とさせていただきます。</p> <p>御 札 (心願成就)</p> <p>奉納杉苗 (心願成就)</p>	<p>お護摩の願事 お願ひ事は一件一願意とさせていただきます。</p> <p>御 札 (心願成就)</p> <p>奉納杉苗 (心願成就)</p>	<p>お護摩の願事 お願ひ事は一件一願意とさせていただきます。</p> <p>御 札 (心願成就)</p> <p>奉納杉苗 (心願成就)</p>	<p>お護摩の願事 お願ひ事は一件一願意とさせていただきます。</p> <p>御 札 (心願成就)</p> <p>奉納杉苗 (心願成就)</p>	<p>お護摩の願事 お願ひ事は一件一願意とさせていただきます。</p> <p>御 札 (心願成就)</p> <p>奉納杉苗 (心願成就)</p>

## 高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中(山上十二丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、いっしょに巡拝致します。

A、不動院から琵琶滝を経由して薬王院まで歩く  
B、ケーブルを利用する。

(琵琶滝周辺のお大師様は巡拝できません。)  
※ケーブルを利用する場合、代金は自己負担になります。

日 程 五月十一日(火)  
行 程 山麓不動院↓琵琶滝↓仏舍利塔  
↓本堂(護摩修行)↓坊入(昼食)  
↓下山(一号路)↓不動院着(法楽)  
↓解散

参加費 五千円(昼食代、保険料含む)  
集合場所 山麓不動院(八時半集合)  
申込方法 ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

締め切り 五月七日(金)  
〒一九三-八八八六  
八王子市高尾町二二七七  
大本山高尾山薬王院 八十八大師係  
\*申し込み締切り後、請け書(行程表・持ち物等)をお送り致します。  
\*尚、新型コロナウイルス感染症の状況により行程等に変更がある場合があります。



# 登山だより

## 四月行事日程

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

三日、十五日、二十七日

弁天様御縁日

一日

滝びらき

五日、二十日

御詠歌勉強会

八日 (十時山麓不動院)

花まつり(仏舍利塔)

二十四日

月例写経会

二十五日 (十三時山麓不動院)

二十八日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

奥之院開扉供養(十時奥之院)

飯縄様御縁日

二十一日

飯縄様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

○御本尊様の日々の御

加護に感謝し、百味のご

供物を捧げて供養する

法要です。

皆様の御志納を受け付

けておりますので、ご希望

の方は大本堂までお申し

出下さい。

尚、法要終了後に百味の

お札を授与致します。

御志納金 一口三千円以上



## 毎日の お護摩奉修時間

(11月1日～4月14日まで)

午前6時00分

〃 9時30分

〃 11時00分

午後0時30分

〃 2時00分

〃 3時30分

ご講中・団体等御相談  
下さい。

# 高尾山春季大祭

大護摩供法要(大本堂)  
柴燈大護摩供(有喜苑)

四月十八日(日)



本年の春季大祭につき

ましては、新型コロナウイルス

イルス感染症拡散防止

対策を徹底した上で開

催致します。

ご参加される方は、当

日朝に検温して頂き、も

し体調が優れない時やご

不安な際には御来山を

お控え下さい。

尚、今後の感染症流行

状況次第では、実施方法

などが変更となりますこ

とをご承知下さい。

## 高尾山春季大祭お稚児募集

昔から「子宝」という言葉がありますように、ご家庭は子孫の成長によつて、子々孫々に受け継がれ発展していくものです。私達が次代を託するという意味では、子供は文字通り宝であります。

皆様方のお子様が高尾山御本尊飯縄大権現様の御加護の下、健康に、逞しく成長されますよう、お稚児練り供養にご参加をお勧め申し上げます。

定員 五十名(定員になり次第締め切らせて頂きます)

参加料 お稚児 七千円 付添人 千五百円  
お申込・お問い合わせは高尾山お稚児係まで

☎〇四二一六六一一一五

## 訂正とお詫び

先月号十六ページ上段にあります、「国土安隠」の「隠」を「穩」と訂正させて頂きます。

謹んでお詫び申し上げます。



## お知らせ

新型コロナウイルスの感染予防を図る為、境内各所への消毒液設置・換気・職員のマスク着用などの対策を実施しております。御来山の皆さまにおかれましても、引き続き手洗いや咳エチケット等の、予防対策情報に十分留意されますようお願い申し上げます。

高尾山薬王院ホームページ  
<http://www.takaosan.or.jp>

発行所  
東京都八王子市高尾町2177  
大本山  
高尾山薬王院  
郵便番号 193-8686  
電話(042)-661-1115(代)  
FAX(042)-664-1199  
発行人 菅谷秀文  
編集人 渋谷秀芳  
印刷 ヒラツカ印刷社  
毎月1回1日発行  
1部50円